

あとがき

関口博巨

SENICUCHI Hiroo

神奈川大学日本常民文化研究所調査報告第29集『熊野水軍小山家文書の総合的研究』をお届けします。本書は、国際常民文化研究機構の共同研究（奨励）「熊野水軍小山家文書の総合的研究」（研究成果報告期間…二〇一八年四月一日～二〇二一年三月三十一日）の成果刊行物です。

いまなお続くコロナ禍のために、本年一月二十三日の第七回共同研究フォーラム「中世熊野の海・武士・城館」はオンラインでの開催となりました。共同研究期間の最終年度は困難な状況でしたが、オンライン・フォーラムには多数の参加者が集まり、いつも以上の盛会となりました。本書もこうして計画通りに刊行することができました。すべて、研究代表者の坂本亮太氏と共同研究者の皆さまのご尽力の賜物にほかなりません。

本書には、坂本氏の総論、佐藤純一、白石博則、北野隆亮、弓倉弘年、呉座勇一、春田直紀、村上絢一ら諸氏の論稿に加え、充実した「資料編」を収録することができました。「資料編」は文書史料、考古資料、写真図版から成っています。文書史料として収録したのは、久木小山家文書、善妙寺文書、神宮司小山家文書、西向小山家文書、二部小山家文書、そして熊野水軍関係文書です。今後、本書が熊野水軍研究にとって不可欠の基本文献となることは間違いないでしょう。

ところで、日本常民文化研究所（以下、常民研）と西向小山家文書とのかかわりは、七十年前にさかのぼります。一九五一年七月、財団法人時代の常民研月島分室に勤めていた網野善彦氏が、上司の宇野脩平氏に命じられ、京都にお住まいだった小山家を訪ねて古文書を借用しているのです。このときの借用文書が、西向小山家の近世文書でした。

のちに網野氏は、借用文書のなかに「中世文書のないことを知った宇野氏が失望したようだったことをほのかに思い出す」と回想しています（『古文書返却の旅』）。月島分室を率いていた宇野氏は紀州粉河の出身で、紀州の古文書調査を「宿志」としていたのです（『紀州加太の史料 第一巻』序文）。

網野氏ならびに常民研が西向小山家の中世文書と出会ったのは、それから四十年近く後のことにな

ります。神奈川県に招致された常民研は神奈川県日本常民文化研究所となり、網野氏を教授、所員として迎え入れました。それからの網野氏が、財団法人時代に借りた古文書の返却に熱心に取り組んだことは、つとに知られています。

詳細は省きますが、一九八九年、網野氏は、兵庫県に転出した小山家をようやく見つけたし、ついに宿願の古文書返却を果たしました。そのさい、小山君恵さんのお申し出により、返却したものとは別の古文書（中世文書二巻、近世成立の家譜二巻、若干の江戸時代・明治時代の古文書）を新たに託されました。この中世文書二巻こそ、宇野氏が期待していた西向小山家の中世文書だったので。神大常民研があらためて借用したこれらの古文書は、すべて撮影し、中世文書は網野氏が翻刻、近世文書は田上繁氏が整理、目録化したうえで、同年のうちに小山家に返却しています。

ところが、一九九五年一月、阪神淡路大震災が発生し、小山家は甚大な被害をこうむったのです。家屋は倒壊し、君恵さんが犠牲になり、ご息女も負傷されました。こうした想像を絶する大災害のさなか、倒壊した家屋に保管されていた西向小山家文書は、何者かに持ち去られてしまったのです。同文書はいまだに発見されていません。

大震災から九年後の二〇〇四年二月、西向小山家文書の翻刻に思いを残しながら、網野氏は逝去されました。翌年四月に刊行された『紀州小山家文書』（日本経済評論社）は、網野氏の遺志を継いだ田上氏によって刊行された西向小山家文書の史料集であり、中世編二十一点、近世編一五九点、そのほか系図等十一点を、写真入りで収録しています。中世編の翻刻のほとんどは、『歴史と民俗』第6号（一九九〇年）掲載の網野氏「小山家文書について―調査の経緯と中世文書」（のち網野氏『中世資料学の課題』弘文堂、一九九六年に再録）によるものです。

「小山家文書について」の中で網野氏は、「西向の小山家文書に、久木の小山家、さらに神宮寺、二部の小山家まで加えて総合的に研究を進めるならば、阿波国まで含む熊野水軍の実態をより鮮明にすることも可能と思われる」と述べています。

このたびの共同研究「熊野水軍小山家文書の総合的研究」は、網野氏のこうした見通しを発展的、批判的に継承しようとしたものであり、田上氏が編集した『紀州小山家文書』も参照しています。本報告書では、紀州の諸小山家文書の検討をベースにしながらも、文献史学だけでなく、考古学的知見をも総合することによって、熊野の武士たちの存在形態を動態的に把握し、紀伊半島沿岸部・紀伊水道の海域史を探究しています。一口に熊野水軍と言っても、沿岸部に拠点をおく勢力だけでなく、河

川流域を押さえて山間部に拠点をもつ沿岸部でも活動する勢力のあったことを明らかにしたことは、今回の共同研究の成果のひとつといえるでしょう。

本報告書は、宇野氏、網野氏、田上氏らが蓄積してきた常民研のこれまでの成果を批判的に継承し、熊野の武士や紀州海域史についてのさらに新しい地平を切りひらいたものです。宇野脩平氏、網野善彦氏、そして小山君恵さんもきつとお喜びのことと、私は信じています。最後になりましたが、共同研究者の皆さまには、常民研の担当所員として心からの感謝を申し上げます。

二〇二二年三月